

花園大学文学部研究紀要 第五号 二〇一三年三月 抜刷

戦後の鞍山を描く——五味川純平『人間の條件』『歴史の実験』

高橋啓太

戦後の鞍山を描く——五味川純平『人間の条件』『歴史の実験』

高橋 啓 太

はじめに

五味川純平は、ベストセラーとなった『人間の条件』（全六部、三一書房、一九五六―一九五八）において、満洲の国策企業であった昭和製鋼所での労務管理と応召後の軍隊生活、ソ連軍との戦闘とその後の捕虜収容所体験を描いた。五味川自身が投影されている主人公の梶は、ソ連軍の収容所を脱走後、妻・美千子の元に帰還できずに死ぬ。一方、五味川は捕虜収容所から脱走し、昭和製鋼所のあった満洲南部の鞍山に帰還している。

五味川が鞍山に帰還した後の生活を描いた作品は、『歴史の実験』である。この作品は、『中央公論』の一九五九年一月号～四月号まで連載された。『人間の条件』によって五味川の名が世間に広く知れ渡ったのは、『週刊朝日』一九五八年二月十六日号で特集が組まれてからだ^①が、同年のうちに、

『自由との契約』の刊行（全六部、三一書房）が始まっている。『歴史の実験』は『自由との契約』の次に発表された作品ということになるが、『自由との契約』の第六部が刊行されたのが一九六〇年なので、完結した順番でいうと、『人間の条件』に続く第二作ということになる。

鞍山に帰還した五味川は、中国共産党軍（以下、中共軍）管轄の鞍山市政府に関係する組織の一員として、日本人の民主化に従事していた^②。『人間の条件』の第六部でも、日本の敗戦によって、美千子を含めた満洲の日本人が苦境に陥る様子が描かれる中で、『歴史の実験』につながるエピソードも登場する。『人間の条件』でも『歴史の実験』でも都市名は明示されないが、どちらも鞍山をモデルにしていることは明らかである。

本稿では、『人間の条件』第六部と『歴史の実験』を併せ

読むという、いささか変則的な読解を試みる。そして、五味川が日本の敗戦によって変化した鞍山の状況や、留用（中国に残留した日本人が中国側の機関に徴用されること）の経緯をどのように作品化したのかを明らかにしたい。

一、敗戦直後の鞍山

まず、鞍山という都市の概要をまとめておきたい。⁽³⁾鞍山は、満洲における鉄鋼業の中心地であった。日露戦争後、南満州鉄道株式会社（満鉄）が鞍山に鉄鉱石を発見し、一九一八年五月に満鉄鞍山製鉄所を設立した。同製鉄所は、一九三三年六月に満鉄から分離独立する形で株式会社昭和製鋼所となり、一九四四年四月には、本溪湖煤鉄公司・東辺道開発株式會社と合併して満洲製鉄株式會社となった。五味川が勤めた時期は、昭和製鋼所の時代である。五味川は家永三郎との対談の中で、「鞍山というのは特殊な街でして、日本人市民は約八万だったと思いますが、昭和製鋼所とその子会社だけでもつてるといような街です⁽⁴⁾」と述べているように、企業城下町となっていたことがわかる。

鞍山も含め、満洲の各都市には、日本敗戦後の半年〜八月ほどの間に三つの異なる軍隊が進駐した。⁽⁵⁾まず、敗戦直後

は南下したソ連軍が占領し、その後中共軍が進駐した。しかし、日中戦争のため協力関係にあった中国国民党との内戦が再開され、一九四六年に入ってから中国国民党軍（以下、国府軍）が中共軍を追い出す形で各都市に入城した。言うまでもなく、中共軍はその後形勢を逆転し、各都市を奪い返すことになるが、その時期は本稿での考察の対象外である。

各軍の鞍山への進駐時期は、次の通りである。⁽⁶⁾八月二三日にソ連軍が入り、翌九月には中共軍が進駐、ソ連軍の管理下で市政を担った。一九四六年三月、国府軍の侵攻によって中共軍は撤退を余儀なくされ、四月一日に国府軍が入った。

五味川が鞍山に帰還したのは、中共軍が進駐している時期である。鞍山で五味川とともに活動した横井亀夫・宥井尚武・吉田行雄は、それぞれ『五味川純平著作集』全二〇巻（三一書房、一九八二〜一九八四）付録の「月報」に回想を載せている。三人による回想の内容については詳しくは触れないが、敗戦時に鞍山にいた彼らは進駐した中共軍の市政府と協力関係を結び、日本人に向けた新聞を発行する「文化解放連盟」を結成したという。そして、一九四五年一月、ソ連軍の捕虜收容所から脱走してきた五味川が帰還し、「文化解放連盟」に加わっている。五味川は、一九四六年二月に両親の

いる大連に向かっているのです、鞍山にいたのは三ヶ月ほどであったということになる。なお、有井と吉田の回想によれば、鞍山に残っていた「文化解放連盟」の他のメンバーは、国府軍が近づき撤退した中共軍の後を追って、行動を共にしたという。『歴史の実験』も、「文化解放連盟」に相当する組織のメンバーが先に撤退した中共軍を追うところで幕を閉じる。五味川はこの三ヶ月間の鞍山での活動について、具体的な記録や回想をほとんど残していないが、映画『人間の条件』の出演者で、撮影に入る直前であった有馬稲子との対談において、次のように語っている。

私はちやうど梶がああやつて逃げたようにして生きて帰って、最初にあの小説（『人間の条件』―引用者注）に出ている町に帰りましてね。あの当時の満洲はどこでも民主化運動がはじまつたんですが、私も会社にはないですがまあ中共系の施設がありまして、そこに日本人が八万人くらいと中国人が三十万人くらいいました、その日本人というのは赤ぎらいに徹底的に教育されてるでしょう。それで中共の政府とうまく行かないんで

す。そうなると日本人に非常に損害がくるわけです。だからどうしてもうまく調整しなければならぬので、私たち、民主化運動のグループが運動してたわけですがね。それが二十年の秋から二十一年の春ごろにご承知のとおり中国の内戦になつて、それで国民党軍が入ってきたから、私どもは捕えられるとやられるわけですから逃げたんです。⁽⁸⁾

漠然とした説明が多く、五味川の経験が『人間の条件』や『歴史の実験』にどの程度活かされているのかはわからない。しかしだからこそ、フィクションを読むことで、五味川が満洲国崩壊後の日本人居留民をどのように描き、また「文化解放連盟」での活動をどのように振り返っているのかを知る必要がある。

二、『人間の条件』の沖島

『人間の条件』の梶は、第一部・第二部において、会社の鉱山で使役させる中国人捕虜（「特殊工人」）の待遇改善をめぐる、採鉱所の所長や同僚の岡崎と対立するが、一方で理解者も存在する。その理解者とは、梶とともに「特殊工人」の

労務管理を担当する沖島である。沖島は第一部と第二部、そして第六部にも登場する。第二部の最後で辺鄙な鉾山に左遷させられるが、第六部では、梶の帰りを待つ美千子らとともに敗戦後の「街」にいる。本節で注目するのは、この第六部における沖島である。

完結編である第六部の中心は、梶が敗残兵として他の兵士や民間人を連れて満洲を彷徨し、美千子の元に帰還しようとする道程である。しかし、第六部冒頭は沖島や美千子のいる敗戦後の「街」の様子から始まり、中盤にも、二人が「街」での生活に悪戦苦闘する様子が挿話的に挟まれる。両者を合わせて第六部全体の約四分の一という、ある程度の紙幅が割かれている。美千子の戦後を描くという物語構成上の必要性があったにせよ、本稿の問題意識と照らし合わせてみると、敗戦後の満洲に残った日本人居留民が描かれていることの意味は小さくない。

第六部の冒頭で描かれるのは、「街」に進駐したソ連軍に対する沖島や美千子の失望である。敗戦直後に「本社の街」に戻ってきていた沖島は、ソ連軍の将校に日本人への強盗や強姦をやめるよう嘆願するが、聞き入れられない。美千子は白昼の大通りを歩いていて複数のソ連兵に絡まれるが危うく

難を逃れ、「軍隊って、何処の国でもおんなじなんですよか？」と沖島に眩く。

第六部中盤に挿入される場面では、ソ連軍兵士による横暴は収まっているが、日本人の「寄るべのない復員者」や「若い独身者の一部」が同じ日本人の家に押し入る事件が起きている。この種の連中は、美千子たちが住んでいる白蘭荘にも押し入り、激しく抵抗した友人の珠代を連れ去って輪姦した。戻ってきた珠代は娼婦となり、美千子やもう一人の友人の靖子と疎遠になる。美千子は靖子の発案により、「山手の奥さん達」の着物を本人に代わって街頭で売り、手数料をもらうことで生計を立てようとする。沖島も「別の町角で、「私設専売局」と称して、巻煙草を売っていた」。

しかし、二人とも買い手である中国人への対応に苦労しており、敗戦によって日本人居留民と中国人との地位が逆転したことを、身をもって知ることになる。美千子は数人の中国人に着物を盗まれ、沖島は露店の前でお金をもらうまで拝礼・叩頭し続ける「一人の中国人の乞食」を追い返すことができない。前者の場面では、語り手が「いままで踏みつけられていた民族の報復意識がしばしば非道な形をとって現われることがある」という説明を加えており、後者の場面でも、沖島

の視点から「こちらは敗戦国民である。相手は、乞食とは云つても戦勝国民なのだ。そういう意識が障碍となつて、制裁を加えるどころか、難詰することさえも出来ない」と語つている。

この後、美千子は沖島を仲間にして商売を続けようとするが、沖島には「美千子から仲間に入ってくれと頼まれる前に、二口の声がかかつていた」。一つは、「旧会社の幹部や街の有力者達が中心となつている「日本僑民会」の通訳としての勧誘であるが、「この街に出来た中共系の政権に対して、そういう名分の下に自分達の利益を温存しようとするものであることを見破」り、誘いを断る。もう一つは、「能登という面識のない男」による「日本人民主義者の団体を作つて市政府に協力する必要がある」ので参加してほしいという誘いである。

満洲の各都市では、敗戦直後から僑民会や居留民会と呼ばれる日本人の自治組織が作られていた。⁽⁹⁾ 鞍山では、一九四五年八月二日に早くも治安維持会が結成されている。この組織は一〇月一四日に解散するが、同一七日に日本人僑民会が発足する。僑民会は改組を経て、翌年二月に解散となる。国府軍が進駐した四月に新日本人居留民会が発足するが、国府

軍管理下で鞍山日僑善後連絡処が開設されたため、居留民会は解散となり、同会会長の石川義助、副会長の小野平八郎は、それぞれ日僑善後連絡処の主任・副主任となった。

こうした自治組織は、鞍山の有力者たちを中心にしていった。例えば、日本人僑民会の顧問は満洲製鉄株式会社理事長の岸本綾夫であり、同会の二人目の会長は元鞍山市長の岩満三七男であった。もつとも、これらの有力者は中国側から戦争犯罪人とみなされていた。岸本も岩満も中共軍に逮捕され、岸本は行方不明（共に逮捕された夫人は獄死）、岩満は銃殺という最期を迎えている。⁽¹⁰⁾ 五味川は、鞍山に帰還した際の自治組織に関しては何も述べていないが、先述のように、『人間の条件』において沖島は「日本僑民会」の勧誘を断つており、これらの自治組織に対する批判的な立場をうかがい知ることができる。

一方、能登が作ろうとしていた「日本人民主義者の団体」は、五味川が実際に働くことになる「文化解放連盟」と考えてよいであろう。ただし、五味川は生還したので「文化解放連盟」に入ることができたが、『人間の条件』の梶は生還できなかった。したがって、沖島の立場をどのように捉えるのがここでの問題である。沖島は能登からの誘いを一旦

保留し、「梶の奴なら一も二もなく飛び込むだろう」と思うと同時に自らを省みる。

かつては通訳として軍の「清郷工作」に従事した男が、時勢が変わったからといって、民主主義者ヅラは出来ない。前歴にこだわらずに、真剣に「自己批判」を果して、出直すべきだということも、わかっている。わかっているから、やれないのかもしれない。ただ自己批判をすれば、自分を許せるのか。いいかげんな日和見主義と何処がどれだけ違うと云い切れるのか。

第一部には「清郷工作」の説明がある。それによると、「清郷工作」とは、日本軍が「敵性部落と認めた部落」に入り、男を労働力として強制連行するほか、強姦や略奪・虐殺を行うことである。沖島は、老虎嶺で労務管理に従事する前に、通訳として「清郷工作」の現場にいたことがあり、労務管理を担当した「特殊工人」の中にも「清郷工作」によって連行された者が多くいた。

この後、沖島は思わぬ形で「自己批判」を迫られる。老虎嶺で沖島や梶の方針に強く反対していた岡崎が「特殊工人」

虐殺の容疑（虐殺したのは事実である）で中共軍の保安隊に逮捕され、通訳として沖島の名前を出したために沖島は連行されるのである。沖島は「特殊工人」を殺してはいないが、暴力を振るった事実があったために拘留され、翌日、「ファン同志」（おそらく共産党員だと思われる）と呼ばれる方という平服の男に尋問を受ける。方は、沖島と梶が「特殊工人」の待遇改善を目指したものの脱走者が相次いだため、「厳罰主義に変更し」たとみなし、「あなた方は、近い将来に日本が負けることを信じて、増産に励んだのですか？」と問う。梶は「特殊工人」の劣悪な労働環境や待遇を不当なものと考えて待遇改善を提案したのだが、会社がその提案を受け入れたのは、工人の就労率を上げ、採鉱を増産させるためであった。「特殊工人」の待遇を改善することは採鉱の増産につながり、結果として日本の戦争にも貢献することになるのである⁽¹⁾。方が突いているのは、この矛盾である。

沖島は方の問いに対して、「あなた方は、目的と行動が一致していました。だから立派なのです。『中略』私達も、立派な目的を持つことは、出来ました。その目的を貫こうとすれば、殆ど間違いなく、生活を失わなければならないかもしれません」と答える。戦争犯罪に加担したか否かを、「単純明快な

論理」で分けることはできないのである。梶にも同様のことが言えるであろう。

結局、沖島は「能登同志」に身柄を預けられるという扱いで釈放され、「日本人民主義者の団体」で活動することを決意する。その後、沖島がどのように活動したのかは「人間の條件」では描かれない。中共軍の指導下に入った「日本人民主義者」の姿は、『歴史の実験』に描かれることになる。

三、『歴史の実験』の田波

『歴史の実験』が、五味川自身の鞍山帰還後の活動を踏まえていることは前述した。吉田行雄が、『五味川純平著作集』第九卷(三一書房、一九八四)の「月報」の中で「多くの作品の中で『歴史の実験』がある。五味川もこの作品には愛着と執着があると語っている。三十歳当時の五味川理論と夢が流れているようだ。作品の中に出てくる人物には実在名が多く出ている」と書いていることから、それは裏付けられる。『歴史の実験』の同時代評では、横井行雄が「この作品の積極的な意義は、終戦直後、革命の過渡期の満洲と日本人居留民たちの動きといった大きな素材にとりくんだ作者の意気(ごみ)であると指摘し、篠田一士は「『歴史の実験』をい

なる種類の文学作品とも認めることはできない」と作品として全否定しているが、「太平洋戦争直後の国共内戦下の東北地区における日本人たちの動きをえがくことは、現代の小説家にとって大変誘惑的な主題であろう」と述べている。⁽¹³⁾二人は、五味川が戦後の鞍山を単なる「素材」として取り上げたわけではないことをわかっていないであろうし、それ以前に、舞台となつている「町」が鞍山をモデルにしていることすら知らないのではないだろうか。

『歴史の実験』の主人公は田波という男で、すでに市政府管轄の「解放連盟」の一員として活動している。ただし、「生死もわからなかった田波が、ともかく戦地から生きて帰つて来たのだ」という田波の妻・章子に焦点化した箇所から、田波が五味川のように生還したことをうかがい知ることができると。また、「町」は「田波たちが終戦まで勤めていた巨大な軍需会社一つで成り立っていた」ことも語られている。梶が生還した可能世界(あり得たかもしれない別の世界)の物語として、強引に読むこともできなくはないだろうが、田波の過去に関しては作中ではほとんど明かされることがない。物語序盤には、「田波は、験の裏で、戦争と敗走の過程を描いていた」という、回想の始まることが予想される一文もあるが、

直後に「ひたすらに目ざして来た女は、彼の横に寝ていた」と続き、予想は完全に裏切られる。

そのような問題もあり、『歴史の実験』の田波を梶と重ねるのは難しい。しかし、『人間の條件』の「街」に沖島が働くことになる「日本人民主義者の団体」があったように、『歴史の実験』の「町」にも「解放連盟」という組織がある。「街」の「団体」は発足したばかりで、沖島を誘った能登は「解放新聞の資金作りに飛び廻る」と言っていたが、「町」の「解放連盟」はすでに活動中で、「隔日刊のガリ版新聞『民衆報』を発行している。『歴史の実験』は『人間の条件』の続編ではないが、『人間の条件』においては挿話的な部分に過ぎなかった「街」と「団体」のその後を描いていると考えることができる。

日本人居留民の民主化を目指す「解放連盟」にとつての大きな問題のひとつは、市政府の公式主義的な態度であった。その問題は物語の随所で描かれている。例えば、田波は「民衆報」に、「SOS日本僑民」と題した「日本人が難民化して行く事実を訴えて、この冬を無事にすすには、日本人同士が協力すること以外にはどんなテも発見されない」という内容の記事を書き、市政府外事科長の郭に問い質される。田

波は、敗戦によって生活手段を失った日本人が困窮状態であり、「私たちの新聞を読む日本人大衆」は「何が何でも帰国したい」と考えていると話すが、郭は「田波さんの云うことは、町の反動家たちが云うのと一致しています」と牽制する。田波はさらに、生活の困窮や帰国願望とともに「日本人は反共を徹底的に仕込まれたという歴史的な事実」があり、「どういふ未来を郭さんたちが与えてくれるか、彼らは知らないのです」と説明する。しかし、その場にいた外事科工作員の小池が「それを宣伝するのが、あなたたちの任務でしょう」と言うばかりで、日本人の窮状を顧みようとはしない。小池は日本人だが、「抗日戦線で捕虜になって、延安か何処かで短期教育を受け」たために市政府に所属している男である。

「解放連盟」が抱えるもう一つの問題は、田波が郭に言っていた日本人の反共意識である。田波と章子の隣人・茂木夫人は、「今年の春には国民党軍が来て日本人を全部帰国させてくれる」という噂話をし、さらに「日本人は貧乏になった」が、田波たちは「新聞専売のお墨つきを市政府からもらつて」ので高給取りであろうと、章子に対して嫌味半分に言う。だが、実際は「新聞はそれほど読まれてはいない」ために「主だった男たちは無給」で、「給料は、給料とも云えぬほどの

ものを、ガリ版切りにしか払っていなかった」。

五味川は先に引用した有馬稲子との対談の中で、「日本人というのは赤ざらいに徹底的に教育されてる」と述べていたが、前節で取り上げた『人間の條件』第六部の中にも関連する内容がある。保安隊に拘留され、雑居房に入れられた沖島は、隣にいた男に「国民党がいつ来るか、聞かなかった？」と聞かれる。男は「なんでもかんでも人民に奉仕しろ」という中共軍の方針を嫌い、「国民党が来れば、みんな日本に帰して貰えるんだぞ」と信じている。その後、沖島の身柄を引受けた能登は、「国民党にルートを封鎖されて干乾しになりそうだ」という「悪質のデマが飛んでいる」ことを危惧し、沖島に対して、市政府に「食糧事情をよく聞いて欲しい」と指示を出す。これらを踏まえると、『歴史の実験』の中で、日本人居留民の反共意識がより明確に描かれていることがわかる。

先の茂木夫人の話は空言に過ぎないが、「解放連盟」にはより本質的な批判も浴びせられている。ある時、数人の青年が、青年寮の外壁に貼られた市政府のポスターを嘲笑する。田波は青年たちと口論になり、青年の一人は「このポスターや、あなたが喋ったり新聞に書いたりしてることは、み

んな正しい」が、「僕たちはみんな食うに困ってる」と訴える。結局、「解放連盟」の行動は、困窮する日本人居留民にとって何の意味も持っていないのである。

青年は続けて「市政府やあなたたちに文句を云えば、中国の方がもつと困ってるんだ、でしよう」と言うが、郭と小池が日本人の窮状についての田波の説明をはねつけたことかわかるように、市政府と「解放連盟」の現状認識には大きな隔たりがある。つまり、「解放連盟」は日本人居留民と市政府との間で板挟みになっているのである。田波はさらに、現状認識とは別の角度からも、市政府の中国人や小池と自分たちとの決定的な違いを自覚せずにはいられない。

この男たちは、どんな思想を持っていると云ったところで、終戦まで、植民地で、中国人の上前をはねて生かしていたのだ。たいへん立派な自覚分子です。誰からも、まだ、そうは云われない。けれども、誰から云われなくても、自分で自分にそう云っているのである。小池は、よしんば偶然だったにしても、捕虜になって、中国側に身を投じたのだ。同化しようとして試みた実績がある。形の上では、とても田波たちとは較べものにならないで

はないか。田波はどうか？ 国境で戦い、捕虜にもならず、逃げ帰って来たようなものである。どこでお前は過去を清算したか？ 中共系の政権ができているところへ帰って来たから、尻尾を振っているだけではないか。『後略』

田波は、『人間の条件』の沖島のように戦争犯罪の罪に問われてはいないが、中国人を抑圧する側にいたことへの後ろめたさを払拭できないのである。また、章子は「戦争に敗けて解放運動が起こったから、時世時節とばかりにそれに参加した人たちが、何もかも犠牲にして、なんでも御無理ごもつともで通さなきゃならないってこと。おんなじじゃない、戦争中と」と言い、市政府の方針に従って日本人居留民の民主化のために活動することが、戦時体制への従属と表裏一体であるという歪さを鋭く指摘する。

田波はこの後、反動勢力の日本人が持っていた阿片を運ぶことで大金を得て、日本人の食糧確保のために遣おうと計画するが失敗し、郭と小池から自己批判書の提出を求められる。田波が許されて間もなく「町」には国府軍が迫るが、市政府の面々は「解放連盟」には何も告げずに撤退していた。物語

は、田波が章子と別れ、他の「解放連盟」メンバーとともに市政府を追いかけるところで終わる。阿片を運ぶという展開に対しては、設定上の陳腐さを批判されてもいるが、「過去を清算した」という自負もなく、市政府と日本人居留民の間で身動きの取れない田波が活路を見出そうとした結果であると読むことができる。

おわりに

最後に、以上の考察を踏まえて『人間の条件』の沖島と『歴史の実験』の田波の間に連続性を見出し、五味川が自身の留用体験をどのように作品化したのかについてまとめた。

『人間の条件』の沖島は、中共軍の保安隊に戦争犯罪への加担を問われ、「目的と行動」の不一致のために白か黒かを明確にできなかったが、能登のおかげで釈放された。釈放時に傍にいた「見知らぬ若い平服の男」は、沖島に「戦争中に機会主義（日和見主義）だったからと云って、恥じるのはいが、恥じてるだけじゃ前進にはならないからね」（括弧内原文）と言っていた。沖島にとって、「日本人民主義者の団体」に入ることは、「目的と行動」を一致させるための戦後の再出発を意味している。

一方、『歴史の実験』の田波は、「清郷工作」のような具体的な戦争犯罪に関わったのかは不明であるものの、沖島と同じく軍需会社で働いており、「中国人の上前をはねて生活していた」という自覚がある。敗戦後、「町」に帰還した田波が「解放連盟」で働いているのは日本人の民主化のためであるが、その「目的を貫く」ことは、日本人居留民の困窮解消につながらず、中共軍に「尻尾を振っているだけではないか」という日和見主義の自己嫌悪からも逃れられない。戦中も戦後も時の権力に従っているに過ぎない自分を発見するのである。『人間の条件』には描かれなかった、沖島のその後の姿を暗示していると言えるであろう。

五味川は沖島と田波の姿を通して、戦後の再出発となる鞍山での留用体験において「目的と行動」を一致させ自律することの困難を作品化したといえる。『歴史の実験』の中盤以降の展開や、田波の親友で反動勢力に与する柴崎の存在には触れられなかった。より詳細な分析と作品全体の評価については別稿を期したい。

注

(1) 拙稿「五味川純平『人間の条件』に関する序論的考察」(『花園大学文学部研究紀要』第五二号、二〇二〇・三) 参照。

(2) 鞍山帰還後の五味川に関しては、拙稿「五味川純平の引揚げ体験——鞍山・大連での動向」(『花園大学文学部研究紀要』第五四号、二〇二二・三) で論じている。

(3) 鞍山に関する説明は、満洲製鉄鉄友会編『鉄都鞍山の回顧』(満洲製鉄鉄友会、一九五七) 九―二三頁を参照した。

(4) 家永三郎・五味川純平「近代思想史の欠落部分——在「満」日本人の中国観を中心に——」(『思想の科学』一九七二・一) 一五―一六頁

(5) 敗戦前後の各都市の状況に関しては、『満蒙終戦史』(満蒙同胞援護会編、一九六七) に詳しい。次の鞍山に関する説明も同様である。

(6) 満蒙同胞援護会編、注(5) 前掲書、一七二―一七三頁、二三七―二三九頁、二八四頁、参照。

(7) 三人の回想については、拙稿「五味川純平の引揚げ体験——鞍山・大連での動向」(『花園大学文学研究紀要』

第五四号、二〇二二・三)の中で具体的に触れている。

(8) 五味川純平・有馬稲子「猫と鯛談」(『プレイハウス』

一九五八・九)三八頁

(9) 満蒙同胞援護会編、注(5)前掲書、参照。その後の

鞍山の自治組織に関する説明に際しては同書のほか、

満洲製鉄鉄友会編、注(3)前掲書附録の「安田一郎

氏の日記抜粋」も参照した。

(10) この後すぐに注目する中共軍の沖島への尋問場面で、

沖島は「当時の理事長は、戦争犯罪人として、あなた

方が何処かへ連れて行きました。処刑してしまつたと

すれば、死人に口なしです」と言っている。

(11) 梶の「特殊工人」待遇改善策が抱える矛盾に関しては、

拙稿「五味川純平の中国観と『人間の条件』——第一

部・第二部を中心に」(『花園大学文学研究紀要』第五

三号、二〇二一・三)で考察している。

(12) 横井幸雄「文芸時評」(『作家』一九五九・五)、曾根

博義編『文芸時評体系 昭和篇Ⅲ』第一巻(ゆまに書

房、二〇〇九)二〇三～二〇四頁

(13) 篠田一士「文芸時評(上) 文学の外延の正と負 総体

感のない長編「歴史の実験」(『東京新聞』一九五九・

三・二七夕刊)、注(12)前掲『文芸時評体系 昭和

篇Ⅲ』、一三八頁

(14) 横井、注(12)前掲論、谷田昌平「文芸時評」(『近代

文学』一九五九・五)を参照。

付記

『人間の条件』の引用は『五味川純平著作集』第一(

三巻(三一書房、一九八四)、『歴史の実験』の引用

は同著作集第六巻(一九八四)に拠った。また、全

ての引用についてルビは省略した。本稿は、二〇二

一年度稲盛研究助成による成果の一部である。